

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集:FXニュースレター

執筆担当:斎藤登美夫



◆◆◆ No.0677 ◆◆◆

22/03/02

【ドル/円は2ヵ月連続の小動き、今月早くも正念場】

先日終了した2月のドル/円相場は、月間変動率がわずか2.18円にとどまった。1月も同2.88円しか動いておらず、2ヵ月連続の小動きだったことになる。周知のように、月末に掛けては「ロシア軍のウクライナ侵攻」—というかなりのビッグニュースが飛び込んできたにもかかわらずだ。かなり由々しき事態と言えなくもないが、過去の経験則を参考にすれば、すでに始まっている3月相場は「平均して一年間で一番大きく動く月」と言われている。逆に言えば、それだけに今月も小動きに終わってしまうと、今年一年の相場変動は早くも「終了」ということになってしまうのかもしれない。

◎過去の3月相場は「一年で一番大きく動く月」、期待は高いが…

以前にもレポートしたことがあるが、ここ数年、具体的に言えば2017年以降のドル/円相場は年明け以降の4ヵ月(1-4月)で「年間変動の大半を記録」し、あとの8ヵ月は「ほぼオマケ」といった様相を呈することが少なくない。

たとえば一昨年、2020年はその典型例だったとも言えそうで、ドルの年間最高値は2月に記録した112.23円、対するドルの年間安値は3月に示現した101.19円。したがって、4月以降は101.19-112.23円のレンジ内で一進一退を繰り返したに過ぎなかったわけだ。

それに対し、今年のドル/円はというと、年明け以降113.47-116.35円という値動きで、実はまだ3円も動いていない。

改めて指摘するまでもなく、ここ数年のドル/円は年間を通して動意が鈍いものの、それでも今年の変動はあまりにヒド過ぎる。前段で指摘したように、足もとの3月相場は「平均して一年間で一番大きく動く月」と言われる環境下、期待外れに終わるようだと、今年一年の相場変動は早くも「終了」ということになる可能性も否定できないだろう。「今度こそは」と筆者ならずとも捲土重来を期待している向きが多いことは間違いないだろうが、果たして実際の変動は如何に!?

なお、そんな重要な足もと3月相場の勝敗を振り返っておくと、1990年以降昨年まで過去32年間で16勝16敗。完全に互角の結果となっていた。一般的には、「3月決算期末に向けたリパリエーション」、つまり本邦勢による資金の国内還流など幾つかの需給要因・決算対策もあり円高有利との指摘も聞かれたが、データの的にはまったくドル安・円高が有利とも言えない状況であるようだ。

一方、過去の3月を歴史的な面で振り返ると、興味深い事象が2つうかがえる。

ひとつは、先にも記したように、日本企業の多くが決算期末にあたるものが影響しているのか、「企業破綻」や「損失公表」といったニュースが多くみられること。そしてもうひとつは、「為替や金融市場に関する、歴史トピックスも少なくない」ことだろう。

後者についてのみ典型事例を示せば、やはり1933年のルーズベルト大統領による「ニューディール政策」発表だろうが、ほかにも1ドル=360円の固定相場制導入を決定した1949年の「ドッジライン」発表、1953年の日本株大暴落(通称「スターリン暴落」)などのほか、もう少し具体的なマーケット寄りの事象として、「NYダウが初めて1万ドル突破(1999年)」、「ドル/円が1995年に記録した戦後最安値を更新(2011年)

注:安値を更新しただけで、大底75.57円示現は同年10月—などがすべて3月中に起こっている。また、下落率が20%を超えた1987年の「ブラックマンデー」には及ばなかったが、それでもNYダウの一日の下げ幅が12%強。過去2番目の下げ率を記録したのは2020年の3月16日で、また同12日も下げ幅10.0%を記録し、こちらは歴代5位の記録となるなど、2020年の3月相場は連日のように米株をめぐる様々な記録ラッシュに沸いたことはいまでも鮮明に覚えており忘れられない。

もちろん、こうしたことは毎年確実に起こるわけではない。しかし、再三再四指摘しているようにウクライナ危機がいま現在、進行形で続いている。それもあり北海ブレント原油の先物価格が先日、2014年9月以来、7年5ヵ月ぶりに「1バレル=100ドル」台を示現したことも記憶に新しい。今月も予断を許さないだろ

う。

あまり考えたくはないことだがウクライナを中心とした戦火の拡大や、「ロシア軍のウクライナ侵攻」に味を占め、「中国軍が台湾への侵攻」を強めるといった憶測も飛び交うなど、あちこちで危険な状態が続く見込みだ。ここまであまり動いていないドル/円についても、飽くまで「嵐の前の静けさ」。このあとは様々な世界情勢に翻弄され、大荒れの値動きをたどる危険性も否定できない気がしている。(了)



当レターは、情報提供のみを目的としたものです。内容に関して正確であるよう注意を払っておりますが、その正確性を保証することはできません。投資や運用にあたっての最終的な判断は、あくまで読者自身の責任と判断によって、ご利用いただくようお願い申し上げます。また、本稿の無断転載・転送もご遠慮ください。なお、本稿に関する問い合わせは『FXニュースレター』までお願い致します。



Copyright (C) fx-newsletter limited company All Rights Reserved



FX-newsletter